溝口弘さん
（株式会社なんてん共働サービス 取締役会長）

佐賀県生まれ。昭和四六年五月から半年間、一麦寮（①）にて実習をすることになり、そこで田村一二氏と出会われました。一麦寮での実習を経て、児童指導員として落穂寮（②）に赴任。当初は、子どもたちとの密接なかかわりの中で日々が過ぎていきますが、しだいに自身の差別心に苦しみ始め、落穂寮を辞め、自ら株式会社なんてん共働サービス（③）を立ち上げられました。また、その二年後、働く人の住まいの場を保証するため、ＮＰＯわいわいあぼしクラブ（④）（前身）を立ち上げられました。障害者福祉、高齢者福祉、児童福祉の垣根を越え、誰もが住みやすいまちづくりの実践を様々に展開され、現在は市民共同発電所の取り組みの中で、いも発電の可能性にも関心を寄せておられます。

田村先生との出会い

齋藤　田村先生との出会いは、どのようなものだったのでしょうか。

溝口　私が田村先生の所に来たのは、田村先生がもう六〇歳の時でした。後ろを向いてはって、よろしくお願いしますって言ったら、おうよう来てくれたってそれだけや（笑）。それで、次の日からは、毎朝八時にわしの所に来るようにというので実習生活が始まったんですよ。それで、部屋にはもう一人実習生がいるから、そこで二人で生活をせいと。

朝、その日の作業を指示されるんですよね、移転したまなしですから仕事がいっぱいあるんですよね。予算も何もなかったから、まっ茶々の崖に雑草をとってきて植えろとかね。草刈はした記憶があるけど、雑草取ってきて植えろって言われたのは初めてや（笑）。芝も買えばええけどお金がなかった。で、一か月間の実習費は三〇〇〇円のお小遣いをいただけたんですよ、要するにどこにも出たらあかんということですよね（笑）。その代り酒は飲みたいだけ飲みなさいと、わしが現物をあげると言って一升瓶をくれはるんですよ、なくなったら取りに来いと（笑）。そのもう一人の実習生も酒飲みでね、夜になると酒を飲んでいろんな論議をしながら、昼間は仕事。ふつう実習っていうと障害の人と一緒に絵を描いたり、散歩に行ったり、粘土をこねたりさせてもらえると思ってたんですよね。ただ小さい施設ですから、日課から飛び出してきた子どもたちが、私らが作業しているところを、最初は遠巻きに眺めてるけど、一か月二カ月すると、いつの間にか一緒にやってるんですよね、自分もスコップを持ってきたりして、で、一つの仕事が終わっていくというかね。あ、たぶんこういうことが、難しい言葉で言うたら共育、共に育つということの本質やぞと。自分らからしてあげようとかさせようとか、こういうこと教えようということではなくて、やっぱり自分たち自身が醸し出すというのか、出していく中身を周りの子どもたちが感じ取って、一緒に物事を進めていくっていうことを田村先生は教えたかったんやろうなと。そういうことを含めいろんなことを教えてもらった。

ユーモアもとってもある人やってね、土手の上で作業をしていると、やかんを持ってきてくれはる。その頃はもう講演とか忙しかったから、一週間にいっぺんくらいしか施設におられないんですよね。でも、おられる時は必ず地下足袋を履いて私らが作業している所に来て、やかんをぶらぶらさげて、一杯飲めって、お茶なんやけど中は酒なんです（笑）。そしたらその子どもたちがまた酒飲んどるーっ

て言って大きな声で言うんです(笑)、そしたら田村先生が、いや酒とちゃう、お茶や(笑)って。ほんとにいろんな意味で、子どもたちの関係も非常に開放的ですし、自分自身もおっしゃるとおり水平というのかね、教えるとか教えられるという関係ではないということを身を持って、自分も実践されたし、私たちもそういう教えをいただいて。中身的にはそういうことがなんてん共働サービスをスタートさせたり、今の流れにつながっているというか、そうしようと実践してきたんやなと思いますよね。

「水平な関係性」を模索したい

齋藤　溝口さんが、なんてん共働サービスを立ち上げてやっていこうと思われたきっかけというか、なぜそう思ったかというのを、これまでの職業人生とか、あるいは生い立ちも含めてお話しいただけたらと思います。

溝口　落穂寮というのは、近江学園の中でも重度の知的障害の子どもたちのためにつくられた施設で、その中でも一番重度と言われるクラスをほぼ十年間持ってきたんですよね。当時は、移転してきてまなしの一麦寮とか落穂寮でしたので、子どもたちと一緒に環境整備をしたりしながら。当然給料も安かったし、民間の施設ですから、当時給料の遅配というのもあったし、当然、福祉予算なんて膨らむ前ですから、目の前の食卓の食事もそういいなんてことはもちろんないわけであって、そんな時代ですよね。クラス担任制というので、六、七人の重度の人たちのクラスを保母さんと二人で・・・二四時間三六五日見ていくんですよね、片方の保母さんが休めば、二週間ほど休みがあたらへんとかそんな時代やったんですよね。で、独身ですから、子どもたちと同じ棟で寝起きをするようなんでしたからね、とっても一体感があって充実してたな、と。で、食事は貧しいけど必ず食卓には花があったりしてね。いろんな意味

①一麦寮・・・田村一二氏によって創設された知的障害者更生施設。滋賀県湖南市にあり、社会福祉法人大木会によって運営されています。
②落穂寮・・・昭和二五年、知的に重いハンディを持つ児童たちの生活施設（児童生活施設）として設立。平成十二年からは、成人の更生施設となりました。滋賀県湖南市にあり、社会福祉法人椎木会によって運営されています。
③株式会社なんてん共働サービス・・・昭和五六年創設。現在は、なんてん共働サービス（建物清掃、緑地維持管理）、共生舎なんてん（通所介護、訪問介護、宅老所）、秋桜舎（小規模多機能型居宅介護）を運営しておられます。
④ＮＰＯわいわいあぼしクラブ・・・昭和五八年、働く人の住まいの場を保証するということからあいふる荘（当時の生活ホーム）を設置、その経営委員会として発足。現在は、保健・医療・福祉にとどまらず、まちづくり、環境保全、子ども育成など多岐にわたる地域密着型の活動を、地域の方々と協働で展開。溝口氏が代表を務めておられます。

では厳しかったけど、なんか本当にこう、共にって言うのかな。

でも、だんだん高度経済成長が福祉の方にも。予算が膨らんでいって、宿舎が立ったり、自分も宿舎に入ったり、結婚したり、職員が増えたりして、休みも取れるようになって、自分の好きなこともできるようになって、十分ではなかったけど、自分自身の職員としての身分は、かなり前に比べると保障されていったんですよね。そうすると、かたや精一杯の取り組みをやりながら身分も保障される中で、子どもたちとの距離感が出てきたんですよね。そうすると、あれほど通じ合ってたことが通じなく、通じにくくなって。何となくの距離感、もうちょっと言えば小さな壁が出てきてしまって。これではあかんなと思い出したのが八年目九年目ですね。その頃、田村先生の所に何回も相談に行ったり、当時、今のうちらの応援団、当時の若手中堅の人たちとは施設を越えていろんな活動をしてましたし、チーム溝口みたいなところができあがってたんですよね。そこでいろんな議論をしながら、どうも俺このままじゃ続けられないし、どうもやっぱり外に出るしかないなぁというのをみんなと議論したりもしながら。田村先生は、よう決心してくれたと（笑）。いつも行ったら怒られてばっかりやったのに珍しくお褒めの言葉いただいて（笑）。

更に決定的やったのは、落穂寮からすぐ下に川合製作所⑤ってあるじゃないですか、そこにヒデオ君が実習に行き始めてね。自分の自転車にはマジックでいっぱい落書きして、川合さんの服を着て、ちゃんと帽子をかぶって、すぐ近いのに自転車で行くんですよね、やっぱり自分が仕事をしているという証なんでしょうね。帰る時は油まみれで、真っ黒になって帰ってくるんですよね。またその帰ってくる時、めちゃくちゃいい顔してるんですよ。愚痴を言うわけでもないし、あぁしんどとも言わへんと。にこにこして、喜びというのかね、輝きというのか。それに比べて俺、何してんのかなっていうことを思ったんですよね。やめようかなと思ってた頃ですから、自分の仕事に誇りも何も持ってないというかね、どちらかと言えば疑問の方が強いような、そういうところに差し掛かってましたんで、もう決定的でしたね、あぁやっぱりこういう輝きをもういっぺん取り戻したいなと思ったんですよね。最後のけりを入れてくれたのは彼や、最後のけりを入れてくれた（笑）。自分が保障された職とかサラリーとか持ってる限りはやっぱり水平な関係は俺には無理やなっていうのは思ったんですよね。とにかく、裸になろうと。

しんどい時、支えてくれたのは「やっぱり人だった」

溝口　とにかく裸になることだけは決めてたけど、後は何も決めてなかったのでね。やっぱり世の中の役に立つような仕事、もっと言ったら誇りを持てるような仕事を私もやりたかったし、障害のある人たちもやっぱり一緒にやりたいなと思ったので、施設の中で環境整備なんかもずっとやってきたので、草刈とかそういうことが仕事にならないかなと思ってスタートしたけど、世の中そんなに甘くなくて（笑）。あたりまえやね。当時、小規模作業所というのは県単事業で、職員人件費補助みたいな形で補助金が出てたんですよ。やっぱり職員対ハンディがある人、今で言ったら利用者みたいな図式は、そんなこととるくらいだったら施設に残ってたわけであって、そうじゃない形をもう一回模索しようと思ってましたんで、当然それにはのらないと。だから、言うたら、いっかいの個人事業みたいなところからスタートした。わずかな退職金でトラックとか道具を買って、プレハブの作業場を建てるには仲間たちからお金を借りて、スタートしたんですよね。でも、準備はしたけどなかなか仕事はない。あたりまえですよね。

それともう一つ非常につらかったのは、お金はみんなが貸してくれたからそんなつらくなかったけど（笑）、やっぱり、自分とか自分のチームの未熟さというのか。物理的な意味でも未熟でしたし、お付き合いも未熟、請求書を持って人様からお金をもらうことすら抵抗あったんですよ。商売っていうことが分ってなかったんです。資金繰りのこともまったく未熟、お金は借りればいいと思ってたしね、金融機関との付き合いも何もなかったし。

齋藤　お金は、誰が貸してくれはったんですか？

溝口　チーム溝口。核となってるのはやっぱり今の七人衆と言われてる七人ですね。関わる会っていうのはもっと人数多くて一〇〇人近い人応援団があったんですけどね。仕事が本当になかったんですよ、一週間に一つ二つ。地元の行政から仕事もらうようになったのはやっぱり五年目くらいからかな、その頃からちょこちょこっと近所の工場とかそこらへんから仕事をもらうようになったりなんかして。時間がかかったんですね。あたりまえやけどね。

最初の一年目二年目くらいに、愚痴をこぼしに田村先生の所行ったら、またおそろしく怒鳴られて（笑）。ばかもんっ

⑤川合製作所・・・株式会社川合製作所。昭和四二年創業。自動車部品の加工・組立・包装などを行なっておられます。障害者授産施設の開設や障害者の就労支援に尽力、平成二二年には、滋賀県中小企業同友会から「滋賀県で一番大切にしたい会社」の一つに選出されておられます。

て言って（笑）、どこの豆腐屋の立ち上げでも魚屋の立ち上げでも三年間はそんなもんあたりまえじゃと言って、何を甘ったれなこと言ってるみたいなことで怒られたんですよね。だからやっぱりどこか、障害のある人と一緒にやるということで福祉の衣を着てたんじゃないかという気がね、今から思うとしますよね。甘えてたということですよね。

齋藤　衣というのは、いいことしてるんだから、というような。

溝口　うんうん、だから、仕事も来てあたりまえやという意識があったんでしょうね。そこにまた一喝されて。世の中のことを分ってないなというのをまたしても教えられたんやね。

齋藤　落穂寮の中での取り組みの中で、溝口さん以外にも同様の違和感を感じている方々はいらっしゃったにも関わらず、溝口さんだけが辞めるという決断で、なんてん共働サービスを起こされるということの、何か違いっていうと違うんでしょうけど・・・

溝口　たぶん、私が辞めてなんてん共働サービスを始めても、やっぱり落穂寮の同僚たちは応援もしてくれたし、作業の手伝いにも来てくれたし、私の後から辞めた人も、ずっと機関誌を発行してくれたり。今から思うとありがたいなと思いますけどね。分かれ目は、自分の食い扶持まで捨てていくかいかないかだけじゃないですか？それは別にいかないのが悪いとは言わないし、いくのがいいとも言わないし。そこやと思いますよ。

齋藤　奥さまの存在も大きかった。

溝口　仕事が始まって現金収入がなかったからね。仕事がない時は、パートに行くんですよ。時々は、自分の応援団が有休を取って（笑）、応援に来てくれたりしてましてですね。近所のパートの人なんか来てもらうようになったのはやっぱり三年目くらいからですかね。だから嫁さんの存在は非常に大きいですね。

齋藤　いろんな困難があったと思うんですけど、最大の困難というか・・・

溝口　やっぱりね、一つはその未熟さね、自分が偉そうなことを言って仕事ベンチャーしたけど（笑）、こらあかんなと思って自分で泣いた時に救われたのはやっぱり田村先生の存在であったり、仲間たちの応援であったり、やっぱり人に救われたなっていう気がしますよね、お金でも制度でも（笑）何でもなくて、やっぱり人に救われた。で、もっと言えば山ちゃんらにも救われたんですよね、一緒に働いてた彼らにも。溝口さんすごいな、あの人のお世話までしながらなんて言われて、でも実はそうではなくて（笑）、一方的に私だけが踏ん張ってるわけでも何でもなくね、文

字通り支え合いというのかね。四年目くらいからかな、自律神経失調症になったんですよね、時々運転してて気分悪くなると山ちゃんが背中をさすってくれたりね、肩をもんでくれたりね。

齋藤　彼らと一緒だからやってこれたという。

溝口　そうなんですよ、うんうん、ほんとになんか、俺と嫁さんだけで現場へ行くのかとなったら、なんかやっぱり力が入らへんよね（笑）。

齋藤　いてくれることで、力がわくという。

溝口　力がわくというよりも救われたかなってね。書物でも何でもなくて、やっぱり人が支えてくれたなっていうね。

思いをつなぐこと

齋藤　現在、課題に感じておられることとかはあったりするんですか。

溝口　今かなり悩んでるのは、糸賀先生とか田村先生ってこういうこと言うてはったんやなって思ったのはね、組織とか人数とか増えてきてるじゃないですか。全部の人数からすると、かなりの人が働いたり関わったりしてくれている中で、自分の思い、自分が大事にしてきた部分というか、ここは守ってなというようなところがなかなか伝わらないっていうか。一番大事にしてきたつもりやった共にとかっていうっていうところもね、いつのまにか、介護する人される人みたいな関係になってしまいかけてる所があったりね。特に関係性ですね、障害のある人とかお年寄りと、スタッフとの関係性が、職員対利用者になってしまっているというか。世話する人される人くらいはいるかもしれへんけれども、実際は一緒に生活する中でさりげなくサポートしていくというのか、その中に専門性が隠されているというのか、さりげなく専門性を発揮してねということをみなさんにお願いしているにもかかわらず、いつのまにか、現場に行ってみると専門用語が飛び交っているとかね、つまりそういうふうな関係性にしかなってないんですよね、それはたまたま言葉に現れたり雰囲気に現れたりなってしまってね。糸賀先生とか田村先生が後継者育成って言わはったのは、きっと自分たちの理念とか志とかおもいみたいなことをどう足元に伝えていくかっていうかね、人を育てるんじゃなくて、志とかおもいをどう伝えるかということをね。そこが一番、今のつらいところかな。

齋藤　課題を感じつつ取り組んでおられる中で、おもいをつないでいく時のポイントというか、こういう取り組みが必要というのは・・・

溝口　自分がやっぱり没頭することかなと思います。これ

も一麦寮での実習の経験ですけど、やっぱり自分が一生懸命そのことに没頭していることで、結果としては周りの人たちに、波及力というのかね、メッセージを出してるのかなというのか。なんてんを始めてからもそうでした。草刈とか側溝清掃でも、あと三日しかないのにあと二〇〇〇平米も残ってると。ほんなもう山ちゃんのことなんか頭のどこにもあらへん（笑）、がーっとやってると横でも山ちゃんががーっとやってる。あ、これが共に働くなんやなって思いましたよね。あんまり共に働くことに構えてしまうと、たぶんいい関係は生まれへんのやなっていうのがね。そういう、山ちゃんとか、けい子さんのことなんか忘れるような仕事の仕方というのは年に何回もないですよね、だから、いい関係が保たれた日は年間数えるくらいしかないですよ。共働サービスなんて偉そうなこと言ってますけど、本当の共働になったのは、たぶん年間に一〇日まででしょうね。

あとは、やっぱりなんかやらせようとしてる、共に働くっていうことを目的化してしまってるみたいなところがね。今、口腔体操をやってるんですけどね、お年寄りがみんなスタッフと一緒にぱっとか言われると、ちょっと間をおいてけい子さんが、ぱぁか、とか言うんですよね（笑）。その絶妙の間隔でみんなわぁっと大爆笑、体操以上に口の運動になってるという（笑）。共に働くっていうのはこういうことなんやなっていうのをね、彼女も一緒に口腔体操をしなさいとかって、することが共に働くやでっていうことではないんやで、というね。

誰もが暮らしやすいまちづくり

齋藤　おもいをつなぐということにもつながってくるのかもしれないですけど、今後、福祉とか、障害者福祉、高齢者福祉において取り組まれていくような実践というのはこうあるべきだなみたいなことについては・・・

溝口　今一番私が燃えてるのはね、いも発電なんです。市民共同発電所運動（⑥）は湖南市あげてやってますけど、どうも障害のある人たちの関わりっていうのは、参加の余地がないですよね。障害のある人とかが参加できる市民活動、しかもエネルギーの活動とかっていうことを、ずっと引掛りを持ってたんですけど、いも発電だったら栽培にも参加できる、もうちょっと動ける障害のある人なんかは収穫にも参加できる、水やりにも参加できる、草抜きも参加できる、運搬にも参加できる。あ、これやと思って。だから今、市長も一緒に（笑）。

齋藤　次なる発電はいもや、と。

溝口　うんうん（笑）。で、もう一つは、太陽光発電の市民

共同発電所運動で出資の募集に行くと、夜は発電せえへんやろと、冬場は少ないやろ、雨が降ったら発電せえへんや ん、やっぱり原発が要るやんけ、という話になるんですよね、どこへ行っても。やっぱりそれに対する対抗措置がないのよね。そうすると、日本には資源がないやんけ、という話になってくるという。やっぱり何らかのその補充の点でこのことを提示しないとね、ということも含めて。これはやっぱり地域でやっていくということになってくると。

そうすると、障害のある人も年寄りも、いろんな人たちが参加をして、地域興しにも役立つし、エネルギーとしても意味があるし、助け合い・支え合いとしても非常に意味があるので、ぜひこれをと言って、今度はその協議会を作ろうって言って（笑）。大阪ガスも非常に協力的なんですよ、一緒にやりましょうと言ってる。大規模栽培もできるし、空き地を利用して空中栽培するグループ、自治会ごととかボランティアグループごととか、事業所ごととか保育所とか幼稚園ごととか作業所ごととか。更に窓際とかでのミニ栽培グループ、そうすると、極端に言うたらかかわりがない人はいないんですよね、すべてがその、再生可能のエネルギーを利用した電気の生産者になれる、っていうようなことにちょっと燃えてて（笑）。

齋藤　燃えてる目になってますよ、溝口さん（笑）。ロスは出ないんですか？

溝口　残さは肥料にして、放射能を含んでいたらちょっと肥料にはならないらしいですけど、ここらへんは別に含んでへんからそれもまた畑とか田んぼに返していくし、循環ができる、ね。

齋藤　まさにまちづくりですね。

溝口　そうそうそう、最後はいもやさんになって（笑）。・・・質問に合ってましたっけ（笑）？

齋藤　今後福祉、社会はどうあるべきですから、いもで発電すべしというしめくくりに（笑）。

溝口　（笑）。協議会の名前は、こなんイモ・夢づくり協議会にしたんです、おもしろいでしょ（笑）？苦しいこと、つらいこと、ストレスばっかりでは、ね。

齋藤　今日は、長時間にわたり貴重なお話をきかせていただいてありがとうございました。

⑥市民共同発電所運動・・・コナン市民共同発電所プロジェクトが主体となって行なっている運動。溝口氏が理事長を務めておられます。